上向きのベクトルの人権教育

教育実践総合センター・教授
生田　周二

「偏見を持っていけないことなのか？」

人権と聞くと、差別という言葉がすぐ思いつくが、なぜなのだろうか。

「人権を大切に」というと、人に対する思いやり、やさしさという発想になぜ結びつきやすいのか？

もしかしたら、そういう発想こそが問題なのではないか？

人権教育というものは、もう少しおもしろくできないのか？

最近、よく耳にするセルフ・エスティーム、エンパワメントとは何なのか？

こうした点について、最近書いたブックレット『差別・偏見と教育』（部落問題研究所、二〇〇一年刊）で考えている。

人権総合学習の様子

■差別への視点

その中で、「差別という言葉をあまり使わないようにしよう」と提起している。つまり、差別という言葉に本来含まれている権力関係、上下関係への視点を再確認しようということである。

たとえば、「差別をなくしていくのは誰でもない、私たちです。私たちが意を強くして差別の心をなくしていかないと、世の中から差別はなくならないと思うのです。」などは、あまりにも後ろ向きで、心構え的な発想ではないだろうか。

差別という言葉を使うと、どうしてもこのような発想に陥りがちになるところがある。では、次のような考え方ではどうだろうか。

「違いや対立を乗り越え、新しい世界や社会を作っていくのは私たちです。私たちが主体的に、自分たちを取り巻く問題をいろいろな視点から考え、みんなと解決への道を探っていくとき、これまでとは違う関係が生まれ、可能性が広がるでしょう。」

■人権教育を考える視点

これまでの人権教育では、「差別の心をなくす」とか、「その言葉は人の心を傷つけるからよくない」とか、どうしても駄目という発想が強かった。

それは、「火を消す」ことに一生懸命でありすぎていたのではないだろうか。人権という名で、人の言葉や行為を押さえつける危険も可能性も確かにある。

そうではなくて、一人ひとりの存在と可能性を大切にする「火をともす」教育への転換が求められている。

別の言葉で言えば、「単純に『だめ！』なのではなく『なぜ？』を大切に」と「『上向きのベクトル』としての人権」である。

ゼミでの学校訪問の様子

■参加型学習の検討

写真で紹介しているのは、ゼミで訪問したことのある小学校での人権総合学習の様子である。これ以外に、CAP（子ども虐待防止プログラム）を見学したこともある。

このように、授業などでは、できるだけ実践現場の様子を見たり、聞いたり、調べたりしながら、議論を進めていこうとしている。

また、時には自分たちで、ワークショップを行ったり、企画を組んだり、討論したりして、学習活動を援助する取り組みを体験することも重要である。

魅力的な音を探し続けて

音楽教育講座・助教授　前田　則子

■ピアノ

ピアノを弾くのはとても楽しい。私はもう四〇年もピアノを弾いているのだが、いまだに疑問だらけで、どうしたらもっとうまく弾けるのだろうと苦心惨憺の毎日。いろいろな曲に出会う度に、考えるべきことが尽きることなくある。ピアノと向かい合うときは特別な時間なのだ。

研究室の学生も、ピアノがもっとうまくなりたいという気持ちでいっぱいだ。彼らは魅力的なピアノ作品に憧れをもっている。弾きたいという情熱が鍵盤にふれることで音に具現するのだから、彼らの演奏からは「生きる力」が強く感じられる。

半期に一度、ゼミと称する演奏発表会を開き始めて十五回目になる。友達や先輩の前で弾くことは、大変な緊張感があり、失敗はつきもの。しかしそれは次へのステップとなり、同じ目的を持った仲間の演奏を聴くことでお互いを高め合いながら、皆、一年一年、確かに成長していく。

研究室の学生たちと

※音楽棟の三階からはいつも練習ピアノが響きわたり、周囲の皆様にご迷惑をおかけしています。どうぞ暖かい耳で見守って下さい。

■鍵盤の深さは十ミリ

ピアノの鍵盤は八十八鍵ある。押せば高さの決まった音が出るので、続けて押せばメロディーになり、一緒に押せば和音になり、それだけで結構楽しい。この時いろいろなタッチを試みて、指や手の感触を覚えながら音色を聴く。これがピアノへの愛着の第一歩である。

しっかり押して元気な音、愛撫するように撫でたら甘い音、腕の重さをかけてゆっくり落とせば厳かな音、手首をバウンドさせると誰かが踊っているようで、十ミリの行程は工夫次第で無限の可能性を持っている。

だが実際は、ピアノ曲は音がたくさんありすぎて弾くだけで精一杯。タッチの見極めは自分だけでは難しい。ピアノ実技の授業は、ピアノと楽曲を通して学生達が自身に問いかけ、教官とともに考える貴重な場である。

私も先生方に多くのアドバイスをいただいた。

モーツアルトのソナタでは、「そのフレーズの最後の音は弦楽器のように指先にヴィブラートをかけてひきなさい。」『えっ、ピアノでそんなことできるの?』

ラヴェルの“水の精”では、「内声の一と二の指、君は八ミリだけど七ミリタッチにしてごらん。」『えっ、どうやって一ミリの差を出すの?』

先生方の一言は私の大切な宝物だ。

■近現代作品の面白さ

「ドミソ」…明るくて安定感がある。これに「シ」を足すと「ドミソシ」…少し感じが違う。鳴った瞬間よりあとの響きの中に浸りたくなる。この和音が半音階で上行すると不思議な経過を味わえる。また、いつもの音階「ドレミファソ…」ではなく「ドレミ♯ファ♯ソ…」全音階になると、行き先不明の道を行くようだ。

ペダルを踏み続けると、音がにじんでいく。このように近代以降の作曲家達はそれまでの作曲の法則をはみ出して音や時間を構成したので、音楽の表情はぐんと広がった。それによって演奏する者の音色のイメージも広がる。音の移り変わりの微妙さは自然界の風景や光の陰影を連想させたりする。

またオーケストラで用いられる弦管打楽器の個性豊かな音色が求められる。弦楽器のピツィカートを真似て指先ではじいたり、打楽器の衝撃音として拳骨も用いる（決して叩くのではなく）。

音色の工夫によってこそ生きてくる近現代の作品を「音が難しい」としりごみしている人、是非挑戦してほしい。

言葉のように具体的に伝えるのではなく、音楽では言葉で言い表せないことを音色で語りかけたい。